



## 7・13豪雨災害による農林被害調査 ～早期復興を願って～

新潟大学農学部7・13水害調査グループ

2004年は「災」の年であった。7月13日、中越地域に停滞した前線は栃尾市で日総雨量400mmを越えるといった記録的な豪雨をもたらした。山間地では無数の斜面崩壊が起り、大量の土砂が河川に流入した。濁流は河川堤防を越え、そして破堤した。五十嵐川、刈谷田川、中之島川などから溢れた濁流は、15名もの尊い人命を奪い、家屋を破壊し、出穂を間近かに控えたコシヒカリを呑み込んだ。本県でも有数の稲作地帯は、長い所で10日間も濁水に閉じ込められた。

農学部では、災害後直ちに複数の教員が現地視察を行い、市街地の被害もさることながら農地の状況もただならぬ事態であることを認識した。学部の研究推進委員会を緊急に開催し、本水害に対して学部を挙げて取組むことが確認された。大学に対しても学長裁量経費「教育プロジェクト事業」に「7・13水害における農林被害調査と次年度農作業への緊急提案」として申請し、即採択された。調査班は、1) 作物系、2) 土壌・肥料系、3) 山地系、4) 中山間・平野部農地系、5) 農業機械・施設系、6) 航空写真・衛星画像解析系、7) 農林地被害復旧ボランティア系、の7グループに分け、それぞれの専門分野が取組むこととなった。本水害の実態調査やそれからの復旧・復興は、まさに農学部の存在意義が問われているとの認識に立っていたことも事実である。

本報告書には、各調査グループが今日までに解析した結果を掲載する。農林被害の全貌を捉えたわけではなく、まだ今後の解析を待つ課題もある。さらに、当初は次年度農作業（今年の作付）にも有用な提言を行うことを意図したが、必ずしも果たせたと

は言い難い。この種の災害からの復興は、ある程度長い期間を要するものでもある。今回の調査結果を基盤にして、さらなる研究が必要なことは十分認識しているつもりであり、本学部の使命であろう。

本報告書には、農学部学生による農林地ボランティア活動参加のレポートも含まれる。市街地のボランティア活動が、災害からの復旧・復興に大いに役立ったことはマスコミなどによってもよく知られている。しかし、農林地でのそれはほとんど知られていない。農学部では、教員、学生がともに農林地でのボランティア活動について議論を重ねた。被災現地もそうであったが、我々もこの種の活動は初めてであり、手探り状態で進まざるを得なかった。ここに掲載した教員、学生のレポートは、あってはならないが今後の災害時への貴重な教訓となるものであろう。

今回の調査を行うにあたり、新潟県をはじめ関係諸機関には情報の提供を含め、大変な便宜を計っていただいた。記して、感謝申し上げます。また、調査研究費を拠出いただいた新潟大学にも深謝申し上げます。

最後に、未曾有の被害を受けられた被災地の皆様に衷心よりお見舞い申し上げますと同時に、災害からの一刻も早い復旧・復興を祈念申し上げます。